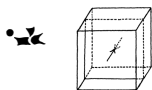


የገረብ ስም ለገጽጽጽ ትክክል የሚገኝ ስራ

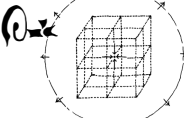
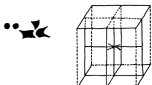
ミネリの銘板

ወላጅዎችዎን ለማስታወስና ለማስታወስ የሚያገለግል ስራ

Book of ETHER



የዚህ ስራ ስም ለወላጅዎች
ሆኖ የሚያገለግል ስራ (ወይን
ዘንድ ወይን ስራ ለወላጅዎች ስራ
የሆነውን ስራ የሚያገለግል ስራ
ዘንድ የሚያገለግል ስራ የሚያገለግል
ስራ የሚያገለግል ስራ የሚያገለግል
ስራ የሚያገለግል ስራ የሚያገለግል



ወላጅዎች ስራ ለወላጅዎች
የሆነውን ስራ የሚያገለግል ስራ
የሆነውን ስራ የሚያገለግል ስራ
የሆነውን ስራ የሚያገለግል ስራ
የሆነውን ስራ የሚያገለግል ስራ
የሆነውን ስራ የሚያገለግል ስራ
የሆነውን ስራ የሚያገለግል ስራ

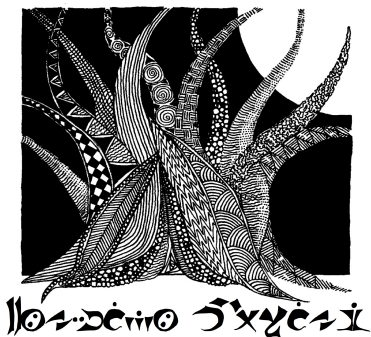
ወላጅዎች ስራ ለወላጅዎች
የሆነውን ስራ የሚያገለግል ስራ
የሆነውን ስራ የሚያገለግል ስራ
የሆነውን ስራ የሚያገለግል ስራ
የሆነውን ስራ የሚያገለግል ስራ
የሆነውን ስራ የሚያገለግል ስራ
የሆነውን ስራ የሚያገለግል ስራ

白橋 升

ወላጅዎች ስራ ለወላጅዎች
የሆነውን ስራ የሚያገለግል ስራ
የሆነውን ስራ የሚያገለግል ስራ
የሆነውን ስራ የሚያገለግል ስራ
የሆነውን ስራ የሚያገለግል ስራ
የሆነውን ስራ የሚያገለግል ስራ
የሆነውን ስራ የሚያገለግል ስራ

ミネリの銘板

Book of ETHER



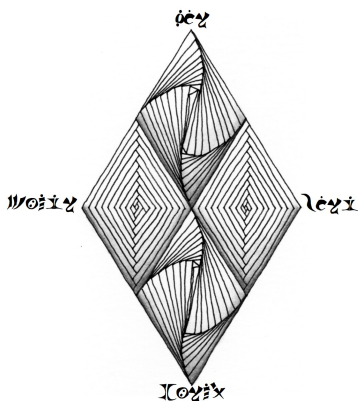
白橋 升

遊星出版

表紙・挿絵
白橋
升

目次

〇	長すぎる前書き	10
一	翼をよこせ	20
二	地下の女王	48
三	魔法の力	63
四	背景	85
五	意識の立方体	100
六	縮退	121
七	Nothing from Nothing	146
八	エーテル祭	169
九	マナアミ	181



Yohkoちゃん

登場人物

● ミオ・アサカゲ

古書店手伝い。自称占い師の若者。主人公。

● エツケン・カノウ

ミオが勤める古書店「太陽堂」の店主。

● オーさん

ミオに占いをしてもらいに来る老人。

● ウド

オーさんの付き人。

● ミネリ

魔女。面倒に巻き込まれそうになったミオを助ける。

● キセーネ

バー「黒猫亭」のマスター。

● イワオト

ミネリの祖父。ミネリに魔法を伝授した。

● シン・クラナミ

ミオの元カノ。

● マナアミ

聖地のシャーマン。

● シンダイ先生（ユウキ・シンダイ大教授）

ミオが信奉している占術書の著者。

● ホノワール・オモタ

シンダイ先生と共にエーテル流均衡化実験を成功させた伝説の技術者。

●
ラム・ザガン

カタ・エレキテール社、現会長。

ホノワール・オモタ氏と共にエーテル流均衡化実験にかかわる。
実験当時は同社開発部部長だった。

○ 長すぎる前書き

さて、何から書けばいいのでしょうか。

私たちが暮らしているこのカタという国と表裏を成すもうひとつの国である、「カタドウリ」のことを思うたび、私の心には不安とも懐かしさともつかないさざ波が広がります。

今となつては思い出すこともむずかしいと言われる方もいらつしやるかもしれませんが、私たちの国——カタは、日照時間の異常という均衡の崩れに、確かに見舞われていたのです。

高高度をいくエーテルの流れにはある種の情報伝達性があり、そのメッセージはあたかも、羽子^{はね}つきの羽子のようにカタと（おそらくは）「カタドウリ」を往^いつたり復^きたりします。この循環が滞ると均衡の崩れを引き起こします。

エーテルはラジオ技術の要ですが、そうかと言つてそれは、私たちが日常的な情報をやりとりするために「だけ」あるものではありません。ラジオ技術にしても、それを利用して愚劣な番組（すばらしい番組もあります）を垂れ流すことも出来ますが、天のエーテル（エーテル流）の循環を促すための「メッセージ」を届けることも出来るのです。

天のエーテルを調律すること——それこそが、ラジオ技術の本分であると私は思っています。毎年立春の日に一切のラジオ放送を中止して、湖の中央にそびえる世界樹の受信所で高高度をいく天のエーテルの声を聞き取り、均衡を取り戻すための「メッセージ」をふだんのラジオ

放送の代わりに、エーテル・ラジオ放送局から天に向かつて送信する——私が所長を務める均衡技術研究所および、カタ・エレキテル社などによるこの地道な積み重ねが、ようやく日照時間の異常をはじめとする均衡の崩れを直すことになったのです。

身に余るさまざまな賛辞をいただきました。

おめでとう。

お疲れ様、よくやった。

君の理論が正しいことが証明されたね。

そうした賛辞をいただく度、私は独りの技術者を思い出さずにはられません。

彼はある日、私の研究室に忽然と現れ、天のエーテルの声をより精確に読み取ることが出来るエーテル・ラジオを設計、製作し、そして誰にも負けない同調精度をもたらす彼独自のやり方でラジオを操作し、そしてまた、忽然とその姿を消して行きました。先の賛辞は私にではなく、彼に帰せられるものであると私は今でもそう思っています。

彼、ホノワール・オモタ君は「カタドウリ」という国から図らずもやって来てしまったのだと私に語りました。なぜそのようなことになったのか。理由は彼自身にもわからないようでした。「カタドウリ」のラジオ技術は私たちカタのそれよりも数倍進んでおり、現在カタには数局しかないエーテル・ラジオ放送局も「カタドウリ」には一〇〇局近くあるというのです。言葉は通じますが、習慣や風習も細かい違いがあつて——通貨単位はカタと同じ「カタドリイナ」

でしたが――カタから見ると微妙にずれているという感じなのです。この、カタと似て非なる国である「カタドウリ」のことが少しわかつたきつかけは、ホノワール君の家名を知った時でした。

――ホノワール・オモタ。

「ホノワール」は個人名、「オモタ」が家名です。そこまではカタと同じです。ところが「カタドウリ」の人々にはその後が続く授かり名がないというのです。これはカタではちよつと考えられないことです。皆さんご承知のとおり、個人名は個々人を識別し、家名は血のつながりをあらわし、授かり名は魂のつながりをあらわします。ということは……彼ら「カタドウリ」の人々には魂がないということになります！ そんなはずはありません。ホノワール君は私の眼の前で生きて、話をしていたのですから。

大つぴらにはしたくないのですが（といっても本に書いてしまえば終わりです）実は、私の授かり名は「オモタ」なのです。

――ユウキ・シンダイ・オモタ。

私の授かり名、すなわち魂の名が「オモタ」であり、それが彼、ホノワール君の家名、血族名、肉体の名前になっている。そして、ホノワール君は「カタドウリ」からやって来たと言います。

ということは、カタから見た「カタドウリ」とは私たちの魂の国そのものではないのか。あ

くまで仮説ですが、そのように考えられるのではないかと私は推測しました。

一方、「逆もまた真なり」の原理に従うなら、「カタドウリ」から見ると私たちの住むカタこそが、魂の国であるということになりましょう。つまりカタと「カタドウリ」はお互いに相補い合つて、この宇宙の創造という過程プロセスを成り立たせているのです。

もしこの推測が正しいとすれば、ホノワール君の授かり名は「シンダイ」のはずです。

——ホノワール・オモタ・シンダイ。

おそらく「カタドウリ」では固有の歴史的な要因によつて「授かり名」が廃れてしまったのでしよう。ホノワール君が去つてしまった今となつては、そのことを確認する術はありません。彼と私の肉体と魂は互いに相補的な関係にあるのです。物理的に証明することはできません。魂の次元にかかわっているからです。

『そりや君、形而上学だよ』

この台詞は大学では（特に私の本職である工学の分野では）侮蔑の言葉です。魂だなんだという話はご法度だという不文律があるからです。しかしそれは、眼に見える側面と眼に見えない側面から成っている被造物を扱おうとする際に、眼に見えない半側面については一切無視すると予め高らかに宣言した上で取り組むようなものです。それこそ科学的な態度に最初から反していることにはならないのでしょうか。加えて言うなら、この、半側面の切り離しには何の根拠もないのです。

もうひとつ書いておかねばならないことがあります。

私は過去に、古代の「占術書」を復刻して現代版に翻訳した「ほんとうのこと、または、でたらめの書」という著作を、本書と同じ私的な版元である「あさやけ同人社」から出版したことがあります。この「占術書」は私のエーテル理論の基盤なのです。エーテルの「メッセージ」はこの「占術書」に書かれた記号で読み解くことができるのです。

どういうわけか、ホノワール君はその本を携えて私のもとにあらわれました。

もちろん「ほんとうのこと、または、でたらめの書」は、私がカタで出版した本です。なぜそれを「カタドウリ」から来た彼が持っていたのか……詳しいことはわかりません。しかし私はそこでカタと「カタドウリ」の間には、エーテル流とは別の一定の情報のやりとりが常にあるのではないかと推測しました。創造の過程プロセスを支えているのはエーテル流だけではないのではないかと。

くりかえし言いますが、物理的には証明はできません。しかし私は、どこへ往いつてどこから復かえつてくるかわからないエーテル流の行く先こそ、ホノワール君がそこからやってきたという「カタドウリ」ではないのかと直観したのです。エーテル流の行き先が、今だに現代科学をもつてしても釈然としないのは、それが眼に見えない領域だからです。現代の科学で判らないというより、エーテルは現代の科学が端はなから相手にしていない領域に往いつて復かえつてくるのです。

忽然と消え去ってしまったホノワール君がどこへ行いつてしまったのか。ホノワール君を知っ

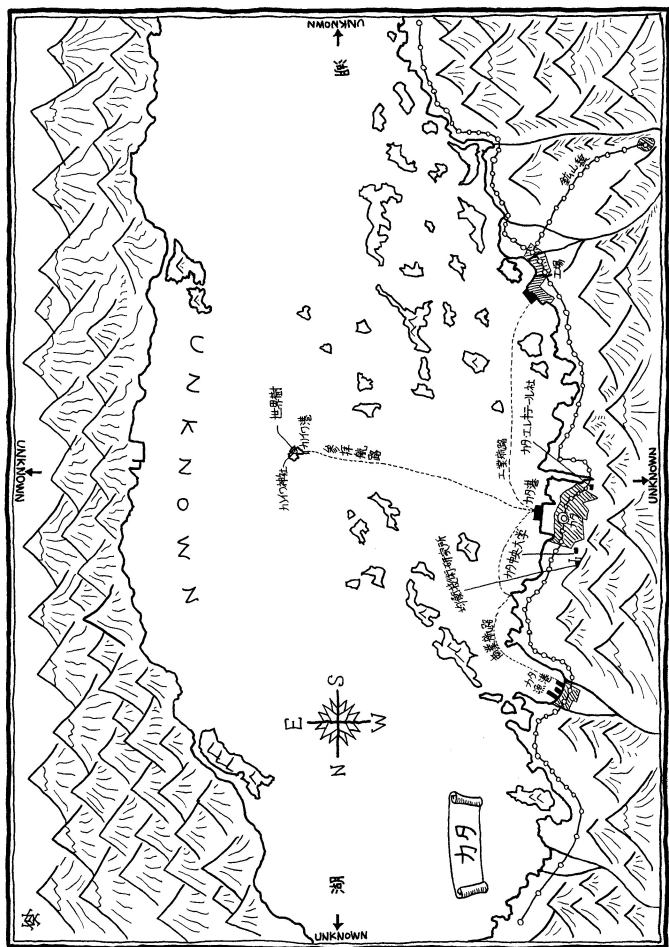
ている人々の間ではさまざま憶測が飛び交っています。私はホノワール君は「カタドウリ」に無事に帰ったと信じています。それだけのことを彼は成し遂げたのです。こうしてカタの均衡が取り戻されたことがなよりの証拠です。「ほんとうのこと、または、でたらめの書」とホノワール君自身という情報は、「カタドウリ」からカタにやってきてその役割を果たし、再び「カタドウリ」に帰って行つたのです。「ほんとうのこと、または、でたらめの書」もホノワール君自身も、エーテル流と同様、カタと「カタドウリ」の間でやりとりされる情報の一部だつたにちがひありません。

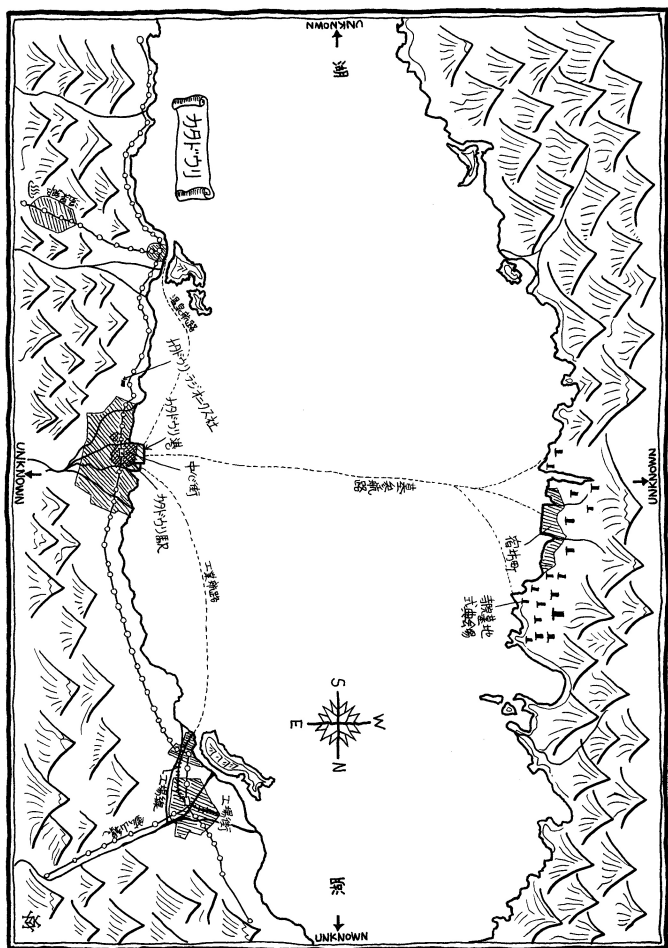
(後略)

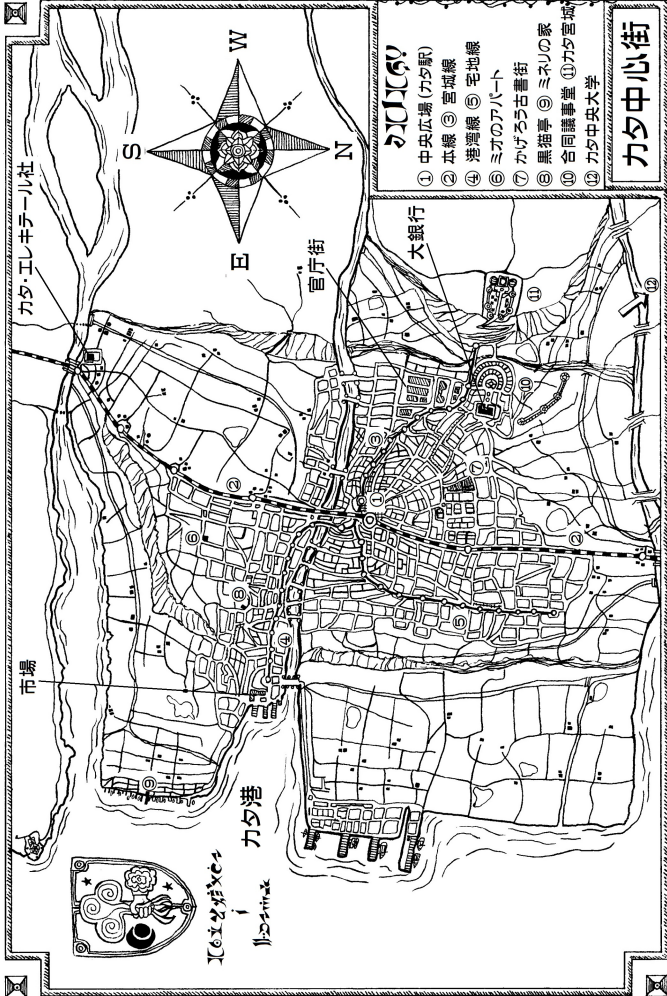
「眼に見えるもの、見えないもの」

ユウキ・シンダイ著

あさやけ同人社刊







カタ・エシキテル社

市場

カタク港
Katakura
カタク港

官庁街

大銀行

カタク

- ① 中央広場 (カタ駅)
- ② 本線 ③ 宮城線
- ④ 港湾線 ⑤ 宅地線
- ⑥ ミオのアパート
- ⑦ かげろろ古書街
- ⑧ 黒猫亭 ⑨ ミネリの家
- ⑩ 合同議事堂 ⑪ カタ宮城
- ⑫ カタ中央大学

カタ中心街



一．翼をよこせ

ぼくはため息をつきながら「眼に見えるもの、見えないもの」を伏せた。伏せた本の奥付を確認する。

また伏せて、ため息をついた。

「眼に見えるもの、見えないもの」が書かれたのは一〇年前だ。

カタの均衡は再び崩れつつある。

誰の眼にもそれは明らかだった。

世界樹のつぺんに設けられた足場である「風見やぐら」からさらに上に設置された受信所で「お告げ」——天のエーテルの声を聞き取り、すべてのラジオ放送を中止して、放送局から

その「メッセージ」に対して返信する。これは今でも、立春の日に変わりなく行われており、お祭り好きなカタの人たちの間では「エーテル祭」というお祭り騒ぎイベントになつてしまっている。

にもかかわらず、今まで地震がなかったような所で地震が起こり、季節を無視してやつてくるようになった嵐はいつまでもカタの上空に居座った。そしてまた、日照と……今度はさらに月相が狂い始めていた。

机の下ショルダーハックの肩掛け鞆の中から「ほんとうのこと、または、でたらめの書」を取り出した。

もう何回も開いた奥付を見る。

著者、カタ中央大学 ユウキ・シンダイ大教授。出版社、あさやけ同人社。これも一〇年前の本だ。

頁には少々ヤケが入っていたが、それでも、ついこの間書店で買ってきたもののように見えた。

小さな本だったがその本はぼく自身そのもの——そういつていいほどのものだった。

ぼくはこうして古本屋の書棚に囲まれた薄暗い片隅に陣取って、煤けた洋灯ランペンの光の下で日がな一日愚にもつかない読書に時間を浪費しているだけのただの店番かもしれない。

だけど天職は占術家だと信じていた。

そして「ほんとうのこと、または、でたらめの書」は占術書だった。

*

あなたは死にたくなつたことはないだろうか。

明確な理由もなく。

苦労や悩み、理不尽に背負わされた責任、虚しさ、無力感から逃れるために死を選択する人は大勢いる。

こういう人たちの場合、はたから見ても自死する理由ははっきりしている。周りの人々はこう言う。

『わかるけどさ、なにも死ななくても……』

ぼくの場合は、何の苦勞もなかったし、特に不自由もなかった。母親は専業主婦、父親は埋蔵文化財管理庁に勤める官吏で妹がひとりいる。父親は生真面目を絵に描いたような男で、家庭に迷惑をかけるようなことはなく、家が経済的に困っているということもなかった。死にたいと思い始めた当時から家とは没交渉で、臨時雇い^{アルバイト}を転々としていたから生活はきつかったが、それを苦にしたことはなかった。彼女もいたし、仲間もいた。借金があるわけでもなかった。

自分でもよくわからなかった。

ただただ死にたいと思っていた。

そういうのを専門医は「希死念慮」と呼ぶらしいが、名前がついたところでなんの解決にもならない。いや実はぼくはその時、そのことを問題とか悩みだとはとらえていなくて、強く、ひたすら強く、「死にたい」と思っていた。

ただそれだけだった。

死へのあこがれとか思春期のセンチメンタリズムとか、そういうことじゃない。ちやうど二〇歳^{はたち}の頃で思春期というにはちよつとおそかった。

自分というものの核がある日、丸ごと抜け落ちてしまった。

『どうでもいい』という台詞が、大気に散っていく時の感覚が、一番近かったかもしれない。

『死ぬ勇気があるなら何でもできるだろう』と人々は言う。

だけど。ちよつと待ってくれ。

そもそもやりたいことなんか、なんにもなかったんだ。

それも徹底的に。

抜け落ちた何かの代わりに心に収まったのが『死にたい』という強い欲求だった。

そんな状態だったので中央広場の青空市場でガラの悪い連中を見たその時も別になんとも思わなかった。

外界への関心がなくなってしまった感じだった。

天気の良い日だった。

古本がぎつしり詰まった屋台を引いた老婆に、ダボダボの上着シャツと下穿ズボンを着けた二、三人の若者が難癖をつけていた。

ぼくは臆病者ヘタレだ。

これについては特大の太鼓判をもらう自信がある。

父親は常に何かを心配していて石橋を叩いてばかりでいつまでも渡り出さないような性分だ。実家にいた頃は心配するために生まれてきたような小うるさい父親が嫌で仕方なかったが、今思えば同族嫌悪だったのかもしれない。

親譲りの怖がり屋で、蛇のような若者たちがのたくっているような場所からは、たとえば、からまれている相手がいかに哀れな老婆であつても、自分好みのかわいい女の子であつても、以前のぼくならさつさと遠ざかつていたにちがいない。

でもその時はちがった。

自分でも想像もつかないような行動をとった。

一番態度のデカそうな若い男に詰め寄り、気味の悪い入れ墨で覆われた青白い二の腕を掴み上げたのである。

自動的に動いていた感じだった。

「やめろ」

「ああ？」

丸刈りのその男はぼくを睨み返し、ぼくの手を振り払った。

「関係ねえだろがあ」

以前のぼくなら膝の震えが止まらないような状況だ。

だが何も感じなかった。

男はぼくの顔すれすれまで顔を近づけて眼を剥いた。

汗臭い。たぶん一〇代だろう。

以前のぼくならすぐにでも謝って逃げ出すような状況だ。

だが男の格好も様子もたんに滑稽で知恵足らずのように見えただけだった。
だからこう言った。

「馬鹿なことはよせて言ってるんだ」

声も震えてはいなかった。

何だか自分の声が……どこか遠くでやっている芝居の台詞を聞いているみたいだった。

ぼくの眼を覗き込んだ男が微かにひるんだのがわかった。

ひよろ長い体格の男だったが喧嘩になつていたら間違ひなく、よく皆が言うところの、ボコられていただろう。

男がぼくの眼中に何を見たのかは知らない。

男は眼をそらした。

広場の石畳の上に唾を吐いた。

「ばああゝか」

愚連隊はぼくを睨みつけながら去つていった。

もう少し気の利いた捨て台詞を言えないものかと首を傾げながら彼らを見送った。
他人事ひとことのようだった。恐れも震えも来なかった。

古本の屋台を引いていた老婆は何度も礼を言い、勝手に自分の身の上話などを（これまた何度）始めたが、ほとんど聞いていなかった。最後に、老婆は金で礼はできないが屋台の中か

ら好きな本を持って行けと言った。断るのもまた面倒だったので、じゃあこれでと手に取ったのが「ほんとうのこと、または、でたらめの書」だった。

*

一〇年前の話だ。

今日と同じような蒸し暑い八月の初めだった。

あの老婆が引きずっていたのは古本ではなくてゾッキ本の塊だった。つぶれた出版社から二束三文で仕入れた本を売りさばいていた。

「あさやけ同人社」は丁度つぶれたばかりで処分待ちの本が山ほどあったのだろう。今ぼくがいる店の売り物である「眼に見えるもの、見えないもの」も、ぼくの持ち物である「ほんとうのこと、または、でたらめの書」も、どちらも小口にしっかりとゾッキ線が入っている。でたらめに引かれた赤線によって、その本は新品ではなく古書店が扱える古物になる。

書いた人はどちらもユウキ・シンダイという、カタの人なら名前位は聞いたことのあるカタ中央大学の学長だった人だ。よくは知らないが「あさやけ同人社」というのはシンダイ先生が個人的に立ち上げた出版社だろう。中央大学位の大学なら必ず出版局がある。先生方が本を出すときはふつう大学の出版局から出すものだが……

「ほんとうのこと、または、でたらめの書」と「眼に見えるもの、見えないもの」を洋灯ランブに照らされた古びた机の上に並べて、表紙をあらためて眺めてみる。

どちらも書いてある内容があやしすぎる。

かたやウラナイの本で、かたや「魔法の伝統」とか何とかに関わる神秘学の本だ。凡そ大学の学問アカデミズム権威的指向とは相容れるものではない。でも……シンダイ先生はエーテル研究の本ではなく、本当は「ほんとうのこと、または、でたらめの書」とか「眼に見えるもの、見えないもの」のような本を書きたかったのではないだろうか。それで大学の出版局ではなく、わざわざ自分で出版社を立ち上げて、これらの本を世に出したのだろう。ところが出す本出す本、とても一般ウケするような代物ではなかったのだ、そんな出版社などたちまちつぶれてしまう。つぶれた出版社の売れない本などは即刻処分される。処分を免れるごく少数部の本が出ることもある。これがいわゆるゾッキ本だが、そういう本は屋台ながしの古本屋やぼくがいる太陽堂のような古書店に流れてくる。

最初は面白半分をやっていた「ほんとうのこと、または、でたらめの書」の占術だったが、すぐにそれが異常に的中することに気がついた。その占術には随分助けられた。元カノと知り合ったのも占術書の導きだった。いつの間にか「ほんとうのこと、または、でたらめの書」の記述イッパシだけで一端の占いができるようになっていた。

シンダイ先生が本の中で言うには、元になっている古代の占術書は非常によくできた独習教

材だそう。だからシンダイ先生自身が書いた「ほんとうのこと、または、でたらめの書」も原書にならったのだろう。

ただ誰にとってもそうだというわけではなさそうだった。ちよつと関心を持った元カノにこの本を読んでもらって、実際に占いをやらせてみたが彼女にとってはサツパリだったらしい。ぼくがやるとよく当たることは確かだったので、彼女を通じて客ができた。客の輪はあつという間に広がった。

占術の仕組み自体はきわめて単純だ。

まず質問をはつきりさせ、それから三つのサイコロを同時にふつて、三八四通りある答えの中からひとつをその時の質問の答えとして選ぶ。それだけのことだ。

元の占術書は読んだことも見たこともない。一般に売られている本ではない。埋蔵文化財なのだ。埋蔵文化財管理庁に行けばクソ面倒な申請手続きの後に閲覧することができるが父親の勤め先に近寄る気は毛頭なかった。

ぼくはある夜、執拗に居座り続けていた『死にたい』という欲求について、なぜそのような欲求が自身の奥底に居座っているのか、いつたいその本質は何なのかを、これ以上ないほど真剣にその占術に問いただしてみた。

他人様ひとのことについてそんなによくわかるのなら、当然占っている自分おのれのことは他人様のことより、より明確にわかってしかるべきだと思ったからである。

回答は——恐しいものだった。

質問そのものを無意味化してしまうというか、粉碎してしまうような答えだった。少なくとももぼくにはそう読み取れた。衝撃を受けた。衝撃を受けたなんてもんじやない。部屋の床に頭を何度も打ちつけながら一晩じゆう震えていた。

あの暑い日に入れた「ほんとうのこと、または、でたらめの書」は、『死にたい』という欲求で満たされ凝り固まっていた胸の中心に、その欲求と見事に入れ替わって、カチリとおさまったのである。

月の明るい夜だった。

「ミイイイオ」

間延びした声が背後の暗闇から聞こえた。

ぼくの名はミオ。

ミオ・アサカゲだ。

ミとオの間に「イ」を入れないで呼んでほしい。「イ」を入れられると女の名か、猫の鳴き声になってしまう。親しい友人達は皆心得ていたのだが、声の主は友人ではなく店主のエツケン・カノウだった。

「なんすかあ」

「ちよつと」

自分の持ち物である「ほんとうのこと、または、でたらめの書」を鞆にしまい、話が済んだらすぐに帰宅するつもりで鞆を肩から掛けた。店の商品である「眼に見えるもの、見えないもの」を店の書棚のものと位置に戻すと、扉を取っ払って暗い赤色の厚ぼったいカーテンを垂らした店の奥の戸口をくぐった。

中の空気はよんどていた。焼けた肉のにおいと、玉ねぎとジャガイモの汁物スツパの香りが残っている。遅い夕食の後だったらしい。よくまあこんな暑い日に熱いものを食べられたものだ。上の方に明り取りの小さな細長い窓があるだけの薄暗い部屋で、エツケンエツケンは奥さんと二人並んで鎮座していた。景気の悪い雛人形だ。それもかなりくたびれた。

二人の前に椅子がひとつ出してあった。

「まあ。かけて」

舶来の「コンセント」などこの店には望むべくもなく、古びたラジオの電源は部屋にたったひとつの電燈の元線から分岐させて引いた昔ながらの電燈線方式で取っていた。ラジオからは年増の女が歌う哀愁歌ブルースのような曲が小さく流れていた。エツケンがラジオの方を顎でしゃくると陰気な奥方が黙ったまま電源スイッチを切った。

出されたお茶には手を付けずに黙っていた。

よつほどの客じやないと出さないお茶なんかが出てくるってことは、ろくな話じやないって

ことだ。

「お前、いくつになった」

ぼくは肩をすくめた。

「三〇ですが」

「ふむ」

エツケンは意味ありげにお茶をすする。が、急に疲れたように、背もたれにその小太りの身体を預けた。このおっさんももう……七〇だったかな。いつも土気色のその顔にはだいぶたるみが出ていた。

「単刀直入に言った方がいいか。おれとお前の仲だもんな」

そんな仲になった覚えはないが単刀直入は歓迎だ。

「実は……お前がいつも使ってる占いの本な。あれ讓つて欲しいんだ」

「はあ？」

声が裏返ってしまった。想定外の話だ。

「オレが欲しいんじゃない。頼まれてさ。困ってんだ」

「どっかから仕入れればいいじゃないですか」

エツケンは顔をしかめた。

「当たれる所は全部当たったさ。何年ここで店やっていると困ってんだ」

飲むまいと思っていたお茶が入った湯飲みに手をのぼした。

冗談じゃない。

商売道具という以前にあの本はぼくの一部なのだ。

「お前さんにとってあの本が大事なものだという事は、わかってるつもりだよ。だからそれなりのことは考えた……継いでみないか、この店」

「なんです？」

声が裏返った。またしても想定外。

「オレも、もう七〇だ」

そういえば店主夫婦には子供も跡継ぎになる者もない。

本屋の仕事と占いやって生活費を稼ぐ場所がなくなってしまうのは困るが、いずれ店はたむんだらうな、とは思っていた。その時はその時だ、とも。

エツケンが言うには、とくに手に職もなければ、三〇でまともな会社に雇ってもらうのも難しいだろう、かと言って、占いや食っていけまい、これからこの店の切り盛り一本に絞ってやっていくのも悪い話ではなからう、ということだった。

「そうすりゃあ、いつまでもその本に頼って生きていく必要もあるまいて。内容は全部覚えちゃってんだろ？ お前が占つてるとこ見てると本なんか見てないじゃないか」

「それはそうですけど……」

「だったら本というブツにこだわることはないだろう。なんだったら全部手持ちの帳面（ノート）に転記しちまえよ。時間はかかるかもしれないが、その位の時間は待つてやつてもいい。譲ってくれりゃあ、お前さんの取り分も払うさ。その上オレが言うのも何だが、この不景氣にまああしつかりした仕事にありつけるんだ。右も左もわかんねえ仕事を一からやるんじゃない。この店の仕事の勘所は大体わかってんだろ？　どうよ？」

確かにそうだった。エツケンと出会ってから丸九年になる。今では店番だけでなく、買い付け、自転車での配達、棚づくり、帳簿の記帳まで、たいがいのことはぼくがやっている。エツケンも奥さんも面倒なことはしたくないのだ。おまけに本という代物はとにかく重たい。

とはいえ今日の話はまったく寝耳に水だった。即答などできるわけもない。

「そんな高値で売れるんですか」

エツケンはため息をついた。ニンニクの臭いがした。

「それがよくわからん。『あさやけ』の本なんざあ、ゴミ同然よ。でも物好きはいるんだなあ。ちよつと断りづれえ相手でさ。お前さんが首を縦に振つてくれりゃこっちの顔も立つ。何冊か出た『あさやけ』の本の中でもそのウラナイの本だけはお前が持つて一冊しか残つてないみたいなんだ。いくら探したつて出てきやしねえ。かげろう古書街のこの長老様が言うんだ。他の誰が探したつて出てきやしねえさ」

思わず鞆の上から本を押さえた。

「需要と供給。いつも言ってるだろ。たとえこの世に一冊だけの本でも、欲しがる奴が誰もいなきや、そりや、世界でたった一冊のゴミだ。だけどその物好きのせいで状況は変わったってわけだな」

靴の上の手が止まってしまった。

一体いくら値がついたのだろうか。

「お前の人生にもかかわることだ。ゆっくり考えな。また話そう」

＊

何度話しても同じだ。

「ほんとうのこと、または、でたらめの書」を他人に譲る気などさらさらない。

その翌日から勘定場の脇に出していた占いの看板をしまい込み、店の外に貼ってあった「萬・占い」と書かれた紙をはがした。

エツケンは「お、店を継ぐ気になったかい」とか言って笑っていたが、そうじゃない。

記憶している限り「ほんとうのこと、または、でたらめの書」に書かれたような占術をやっている人には会ったことはない。星占いやカード占い、占いと名の付くものはこの世にごまんとあるが、切れた線とつながった線を重ねて作った「しるし」や「もよう」のような記号を使っ

た占いは見たことも聞いたこともない。元カノも占いとかフシギなことには、ぼくなんかよりもはるかに詳しくあったが「ほんとうのこと、または、でたらめの書」に書かれていたような占術は初めてだと言っていた。

だから大丈夫だとは思うが世間は広い。

ひよつとしてこの占術のことを知っている誰かがいたとしたら、ぼくが「ほんとうのこと、または、でたらめの書」を使っていることが判るかもしれない。そしてこの一〇年前のゾッキ本にとんでもない値段（いくらか知らないが）がついていることをその人が知っていたとしたら、そのことで厄介に巻き込まれるかもしれない。厄介とまでは言わないにしても、その輩はエツケンと同じように、よこせと言ってくるかもしれない。

いろいろ考えると落ち着かなくなってきた。

面倒はごめんだ。

とりあえず占いの看板は下ろして当面は本屋の店番に専念することにした。親譲りの心配性が顔を出したのかもしれない。占いの看板をしまいながら、この太陽堂に初めて来た時のことを思い出していた。

ぼくの実家はカタの中心街から鉄道で一時間半も行った所にあるシロリという小さな百姓村だ。父親は家業の農家を継ぐのが嫌で官吏になった。村で官吏になった者など他にいなかった。

ので、父親は村の名士ということになっていた。祖父母が亡くなると田畑はすべて売り払ったが、家はそのまま父親は母親とそこに住み続けている。先祖の土地にこだわりがあるからだ。父親は今でも片道一時間半かけて官庁街に通っているはずだ。

父親はぼくを自分と同じ官吏の道に進ませたがつていた。ぼくはそれが嫌で嫌で仕方がなかったが他に特にやりたいこともなかったので、父親に行けと言われた大学を仕方なしに受けた。すべった。見事に。それからカタ中心街に下宿したまま予備校に通い始めた。成績も及ばず、やる気もない。二回目ももちろんダメ。もう勘弁してくれと父親に泣きついたが、受かるまで帰って来るなど言われた。

で。その通りにした。

自分は農家を継ぐのが嫌で勝手な道を進んだくせに、息子には希望も意見も聞かずに自分の道を押しつける。理不尽な話だとも思った。

もつとも聞かれたところで、夢も目標も意見も何もなかったのだが。

はつきりしていたのはオヤジの言いなりになるのだけは死んでも嫌だということだけだった。屁理屈を言わせてもらえば、それも「意志」の一種だったのかもしれない。

実家には一切知らせず下宿を出て、自分で古い集合住宅^{アパート}の一室を借りた。臨時雇い^{アルバイト}を転々として何とか生活をつないでいった。下宿を出てからは、父母とも妹とも音信不通。ゾッキ本の老婆と会ったのがその頃で、太陽堂に立ち寄ったのは「ほんとうのこと、または、でたらめの

書」に書かれていた占いにだいぶ慣れてきた頃だった。

占いの方もぼくからではなく（だいたい彼女を通じて）先方から声をかけられて頼まれるようになった。だがそれだけでは飽き足らなくなってきた。「ほんとうのこと、または、でたらめの書」に書かれていた占術には、単に占いをする以上の何かがある。

参考書が欲しくなる頃だった。

普通の書店をあたつてみても占術に使われる記号シンボルに関連したエーテル理論の本はあったが、占術そのものに関して書かれた本などは影も形もなかった。

要するにぼくは師匠マスターを求めているのだ。

いつそのこと「ほんとうのこと、または、でたらめの書」を書いたシンダイ先生を訪ねてみようかとも思った。しかし時すでに遅く、シンダイ先生は病気で他界されてしまっていた。「あさやけ同人社」が失速したのは本が売れなかったということもあつたのだろうが大黒柱を失ってしまったことが主な原因だったのだ。亡くなっていたことを知って以来、シンダイ先生はぼくの心の師になった。求めれば師が現れるという古来の格言は嘘だと思った。それで、師を求めることなどやめてしまった。

参考書を探してかげろう古書街のあちこちをうろついて太陽堂に辿り着いた時、店主のエツケンと占いの本について話し込んだのがきっかけになって、客寄せがてら太陽堂で占い兼、店番を試みないかと誘われた。

結局、この奇妙な占術に関する参考書は見つからなかった。
もちろん生きた師も。

「店じまいには早くないですか」

思い出に気を取られていて、眼の前に人がいることにぜんぜん気づかなかった。

レジ兼、読書机兼、占いをする机の前に、いかにも人の良さそうな老人の姿があつた。

小柄で痩せており車椅子に座っている。

ラジオでは立秋とか言っていた。

秋なんてものはまだ想像もできないような暑さだというのに、老人は暗い色の膝掛けをかけていた。

車椅子の後には色眼鏡で表情が判然としない黒衣の大男が突つ立っていた。だらりとした長い外套コートだ。こちらもなんだか暑苦しい。

ぼくは店の外に貼つてあつた「萬・占いよろず」と書かれた紙をたたんで机の脇に置き、立つたまま頭を搔いた。

「ちよつと訳ありで。しばらく占こつちいは休むことにしたんです」

「それは残念。凄腕の占い師がいると聞きまして。お見受けしたところ随分とお若いようだが」
面長で顔つきは古木のようなだった。その眼はいつも微笑んでいるように見えたが、奥には底

知れない色が……いや、深い洞うづのように色がなかった。

そんな眼は見たことがなかった。

老人は樹の幹に出来た裂け目のような口元に微笑みを浮かべたまま、ぼくの言葉を待っている。

誰だろう。

会ったことがあるような気もする。

元カノの知り合いのお祖父じいさんか誰かだったかな。

「お上手ですね。じゃあ……最後のお客さんということで。お名前は。ここの占いのことはどこでお聞きになりましたか」

ぼくは腰を下ろし占いの帳面を広げた。

「ほんとうのこと、または、でたらめの書」を儀式きまりじとのように机の隅に置く。

老人は車椅子の背もたれにゆっくりと身を預けた。

「最後の客とは身に余る幸運ですなあ。名前はまあ、オーさんとも呼んでください。ここのことは風の便りです」

オーさんの穴のような眼は、ぼくをとらえて離さなかった。

自分のことは一切言わないつもりらしい。

「時間制限はありませんが見料は一回五〇〇〇カタドリイナです」

「結構です」

「どういったご相談でしょう」

「そうですね……」

オーさんは眼を閉じた。穴のような眼が隠れると少し安心した。

「こういうのはどうでしょう。『私は使命をまっとうできるかどうか』」

「と、いいますと？」

「人は誰でもそれぞれの使命があると私は思うとるんです」

「どんな使命ですか」

「それがわかれば苦労はないんですがね」

オーさんは目を細めて含み笑いをした。

何をきこうとしているのか。占^{きざたい}的を絞ろうと思ったがどうもこの客人には無駄なことのようを感じた。ひやかしてもなさそうだ。掴みどころがないとしか言いようがなかった。

しかし……何という漠然とした問いだろう。それでも帳面に問いを書き起こす。まずは問いを書き出すことが大事だとシンダイ先生も本の中で言っていた。

「振ってみますが。よろしいですか」

老人は黙って頷いた。

正八面体のサイコロ二つと立方体のサイコロ一つを取り出して、三つのサイコロを両手で包

み込み眼を閉じて問いに集中しながら、祈るように両手を揺すった。なに祈っているのか自分でもよくわからないのだが、どんなつまらない問いでもこんなふうにする。問いと「同調」すると決まってしびれるような感覚がある。その感覚とともに両手を開く。

サイコロの各面には数字がふられている。

正八面体のサイコロ二つと立方体（正六面体）のサイコロひとつで、三つのサイコロがあらわすことのできる数字は八×八×六の三八四通りある。

乾いた音とともに深いつやのある骨董品の机に散らばったサイコロの目は「四七六」だった。この番号のいちいちに文がついていて、それをまとめたものが「ほんとうのこと、または、でたらめの書」だ。

長年この占いをやっているので文はなんとなく覚えてしまっていた。だから本は見ないことの方が多かったが、その時は珍しく「ほんとうのこと、または、でたらめの書」の四七六の項目を開いた。

その風貌だろうか。よどんだ空気に乗って漂ってくる線香のような匂いのせいだろうか。オーさんにはどこか、ぼくを落ち着かない気分させる雰囲気があったからである。

本を開くとなんとなく落ち着くのだ。

八面体のサイコロふたつが示す上二桁の数字が答えの概要をあらわす。

「四七六」の場合「四七」がその概要で、シンダイ先生の本には「ちよつと行き過ぎ」と書か

れている。その概要の文章にはこう書かれていた。

「さえぎるものなし。流れに乗り続けていることが大切である。小さい事にはよいが大きな事にはよくない。飛ぶ鳥が声を残してゆく。上るにはよろしくないが、下るにはよろしい、下るには、おおいによい」

さらに「四七六」の言葉にはこう書かれていた。

「四七六 人と会うことなくとおりすぎる。飛ぶ鳥が網にかかる。人災であり、天災である」
これらの文章がそのまま答えになることはまずない。読みかえる必要がある。

再び眼を閉じてそのまま頭の上の方を「見る」。

答えはその辺からやってくるが多い。

飛ぶ鳥。

「大局的な視点」と解釈することもできるが、ぼくにはこの「鳥」がなにかを急^せいて、細かい地上のことを見落としてしまうように感じられた。だからこそ、これ以上高く飛ぶのはよくない、と言っているのである。ぼくは上の方を見たまま答えた。

「大事なことを……見過ごしてしまう可能性があります」

「大事なこと？ それは私の『使命』のことですか」

「そうではなくて『使命』にこだわり過ぎて、大事なことを見過ごすということです」

「ほう」

オーさんは黙り込んだ。

『使命』をまっとうできるか、ということではどうなのですか？」

ぼくはまた眼を閉じて上を「見る」。

「さえぎるものはない」のだ。流れに乗り続けてさえいれば。だがこういう文章は「でもそうはできないだろう？」という含みのあることが多い。条件付きで「さえぎるものはない」と言っているのである。

『流れ』としては問題はありません。結果的に『使命』はまっとうされるでしょう。ですが、すいません、貴方が思われているような形ではないかもしれません」

「それはどんな形ですか」

「今はまだわかりません。しかし……人生の大先輩に大変失礼な言い方になるかもしれませんが、よろしいですか」

元力ノの紹介でやって来るような、世代の近い相談者おきやうさんに対するのとはちがった緊張感があつた。

「かまいませんよ。なあ」

オーさんは後を見上げて背後の色眼鏡の大男に同意を求めた。

男は短く何回か短く空気を吐くような音を出した。言葉には聞こえなかった。「ウドもこう申しております。ご遠慮なくどうぞ」

ウドとやらがどう申しているかはよくわからなかったが、感じたことを言葉にした。

「なんというかそのう……ご自分自身を少々高く見積もり過ぎているような気がするんです。今出た目がそのことについての警告になっています、全体的に。それが原因で大事な『こと』を見過ごすということです……」

オーさんはまた黙り込んだ。そして何度も頷いた。

「肝に銘じておきましょう。ところでその本にそう書いてあるのですか」

「そのままというわけではないのですが……」

話は占断から占術の仕組みの方に流れてしまった。

この占術のおおもととは、切れた線またはつながった線であらわされる象徴シンボルである。

切れた線は「陰」、つながった線は「陽」をあらわす。

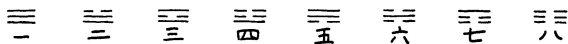
線を三本重ねてつくられるのが「しるし」と呼ばれる象徴シンボルで、二の三乗で「しるし」には八通りある。

さらにこの「しるし」をふたつ重ねてできた象徴が「もよう」で、「もよう」は八の二乗で六四通りある。

「もよう」をつくる線は全部で六本ある。この線のいちいちに文章がついている。文章は六×六四で三八四ある。

占うときに用いるサイコロは、正八面体のサイコロがふたつと、ふつうの正六面体（立方体）

8つの「しるし」



64の「もよう」



サイコロがひとつ、合計三つを同時に振る。

正八面体のサイコロが示す番号がある特定の「しるし」に対応していて、正八面体のサイコロふたつでひとつの「もよう」を示す。

正六面体（立方体）のサイコロは「もよう」を構成する六本の線につけられた文章のうちどれが質問の答えになるのかを特定する。

そんな細かい話を聞きたがる相談者に会ったことはなかった。相談者が知りたいのはふつう、噛み砕かれた最終結論だけだ。しかしオーさんは占術の仕組みのいちいちを詳しく聞きたがった。

人は元来教え好きなものだ。今まで占術そのものについて話す相手もいなかったということもある。気がついたら夢中でしゃべっていた。

「陰と陽というのは二律背反で逃げ場のない象徴です。ここに言ってみれば、合法的な不規則性を持ち込むのが象徴につけられた文章でひいては占者の判断ということになるわけです。今回は文章だけで占いましたが『しるし』や『もよう』だけを観て占うこともありますし文章と併用することもあります」

「風雅だ」オーさんは感じ入ったようにつぶやいた。「実に風雅な占術だ」

オーさんは身を乗り出して多くの手を包み込むように握りしめた。そして軽く上下に振った。「いやいや。大変結構なお話をありがとうございます」

老人の華奢で骨ばった乾いた手……という他に、小さな頃の記憶に軽く日がさしたような暖かさを感じた。なんだろう。祖父も祖母もぼくがもの心ついた頃にはこの世にいなかった。年寄りと一緒に暮らした経験もない。

油ぎった天井からぶら下がった扇風機が蒸し暑くよどんだ店の空気を申し訳程度にかき回す中、老人は最後まで本名を告げることなく車椅子を押す無言の男と共に去って行つた。ぼくの手には今では滅多に見かけなくなつた金貨を握らせて。

カノイワーナ金貨は引き取ってくれる所もあるが、ふつうはそのままでは使えない。使おうと思つたらカタ大銀行に持つて行つてカタドリイナに両替する必要がある。ぼくは手のひらで四角く光る金貨を見つめた。表に世界樹の絵、裏にはカノイワ神社の紋章が刻印されている。一番小さな金貨だったが見料の倍だ。

過分な心付けだった。

そして、いつもいる部屋の入口に下がった厚ぼったい赤いカーテンから首だけ出して、店を出ていくオーさんの後姿を見つめるエツケンの眼を見た時、ぼくは確信した。

この世にたつた一冊しかない「ほんとうのこと、または、でたらめの書」に法外な値を付けたのは、あのオーさんにちがいない。

ミネリの銘板

Book of ETHER

2021年 立春 初版



奥 付

発行 遊星出版

著者 白橋 升

URL <http://athome.la.coocan.jp/> 「遊星出版」

E-Mail landfacer@yahoo.co.jp

イラスト 白橋 升

URL 同上

E-Mail 同上

Special Thanks

ここまで読んでくださったすべての方々

印刷 製本直送.com (株式会社ブックフロント)

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

(<http://tokimi.sylphid.jp/>)

白橋 升

夏がはじまりおわる
ころ

ウミはその名前と裏腹に海に出たことなど一度もなかった。日がな一日、ただ海を眺めているだけ。そんな青年の前に、見ず知らずの、ひとりの子供が現れる……ちよつと不思議なひと夏のお話。

白橋 升

夜の石は天に昇り
空ゆく星に会えた

あなたのようなぼく、ぼくのようなあなた。ぼくとあなたでこの宇宙ができているのだとすれば、ぼくとあなた。それがすべて。旅している人に。旅が好きな人に。これから旅をしようとしている人に。

白橋 升

大きな櫛の樹の下に

均衡世界シリーズ
に迷いこんでしまう。はたしてそこは……

カタ中央大学 ユウキ・シンダイ大教授
ほんとうのこと、または、
でたらめの書

均衡世界シリーズ

「大きな櫨の樹の下に」に登場した占いの
本を忠実に再現。ホノワール・オモタ氏が
手にした不思議な本が、あなたの手にも。
シンダイ大教授の懇切丁寧な説明付きです。
物語の続きはぜひあなたの手で！

白橋 升

ミネリの銘板

均衡世界シリーズ

「大きな櫨の樹の下に」続編登場！舞台は
オモタ氏がカタドウリへと帰った一〇年後
のカタ。古書店を手伝うミオは偶然出会っ
た年上の女に、面倒にまきこまれそうなど
ころを救われる。女は実は「魔女」で……

以下続刊

